

組織目標評価報告書（平成26年度）

部局名：

農学部

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	自己評価
①-1 目標	(1)今年度も引き続き「学部教育に関するアンケート」(全卒業予定者対象)、キャリアサポート説明会アンケート等を実施し、その結果を集計・分析して教員に周知するとともに、保護者との懇談会を開催し、本学部の教育に対する保護者のニーズを調査することにより、学部教育の改善を図った。「学部教育に関するアンケート」では、9割近い学生が本学部の教育に肯定的評価を率しており、また、「授業評価アンケート」では、全授業の平均が5段階でほぼ4.0という高い水準を維持しており、3.0以下の評価はなかった。また、国際化に向けた取り組みとして、教員の資質向上のため、若手教員の海外派遣とプリティッシュ・カウンシルによる英語研修を実施した。さらに、評価の高かった講義のピアレビューを実施し、教員の教育力の向上に努めた。これらことから、学部教育の改善と国際化に向けた取り組みが十分に実施できていると考えられる。 (2)アクティブラーニングを推進するため、平成20年度以来開講している、内閣府提案の「地域活性化システム論」を今年度も開講し、農学と地域活性化をテーマとして、公開シンポジウムを含む全3回の集中講義を実施するとともに、地方公共団体や地域農業者等と連携し、「農家体験実習」、「まきばの実習」、「地域農業活性化実践論」、「バイオマス産業体験講座」等の授業を開講した。これらは、地域社会との双方向交流による体験型の授業であり、社会に対する理解を深めさせるとともに、現場での課題および解決手法について学ばせ、学生の実践的能力を育成した。 (3)成績不振学生に対する担任・指導教員による指導を徹底した結果、今年度は、128名中122名(95.3%)が卒業し、留年者の割合を5%以下に抑制できた。さらに、早い段階から成績不振学生に対する十分なケアを行うため、AAA(アカデミック・アドバイザー・アシスタント)制度を整備した。 (4)生殖補助医療技術教育研究センター及び医学部(保健学科)と連携し、キャリア教育である「生殖補助医療技術キャリア養成特別コース」のカリキュラムにおける実習教育を充実させ、改善を図った。 (5)全学MPコースの教育に引き続き参画し、多様な人材輩出に貢献した。また、国際バカロレア入試の選抜方法の改善を図るよう検討し、平成29年度から改正することとした。 (6)今年度も成績優秀者等に対して11件の学部長賞表彰を行い、学生の学習意欲の高揚と、社会貢献に対する意識啓発を図った。また、外部英語検定試験のスコアに応じた検定料補助については、6件の補助を実施し、グローバル化に対応できるよう学生の語学力の向上に努めた。
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
(1)留年者を、同年度入学の卒業予定者の10%以内に止めるよう指導する。 (2)学生のモチベーションを向上させるため、学部長表彰10件、語学検定料補助5件を目標に実施する。	
②研究領域	自己評価
②-1 目標	(1)科学研究費補助金、受託研究費等の外部資金獲得に向けた積極的な取り組みを行った。科学研究費補助金の申請についても、新規申請者数 61件+ 継続件数24件/教員数65人×100の値が130%となり、目標を大きく超えた。また、共同研究費・受託研究費については、35件を受け入れ、目標としていた30件以上を十分上回り、受入金額も前年度の170百万円から212百万円に増加した。 (2)学部内外における共同研究・受託研究を活発に推進した。農林水産省中国四国農政局、岡山県、国立大学法人岡山大学及び岡山県農業協同組合中央会の四者による農業分野及び関連分野に係る包括連携協定に基づいて設置されている産学官連携推進会議には、農学部長、副学部長が参加しており、今年度も「地域活性化システム論」、農学部シンポジウム等を実施し、産学官連携事業に積極的に取り組んだ。学内では、今年度も資源植物科学研究所との合同セミナーを開催して人的交流を図り、共同研究を推進した。また、「低炭素社会と食の安全・安心を統合した環境生命科学研究」には多数の教員が参加しており、12月8日に開催された研究発表会では、多くの発表を行った。 (3)引き続きアジア・アフリカ諸国の大学等との交流協定を基盤とした国際学術交流と、アフリカにおける共同研究プロジェクトを推進した。資源植物科学研究所と連携して、日本学術振興会研究拠点形成事業に参加し、ケニアのジョモ・ケニヤッタ大学で開催された「第9回ジョモケニヤッタ農工大学シンポジウム」にも学部長以下5名の教員が出席した。 (4)NPO法人「中四国アグリテック」と連携し、産学官連携による研究活動を推進した。また、外部資金獲得につながるセミナー等を学部長室から積極的に案内し、参加を促した。11月12日～14日の3日間東京ビッグサイトで開催された「アグリビジネス創出フェア2014」にも参加し、研究成果の広報をするなど、産学官連携に向けた取組を積極的に行った。 (5)医学部保健学科とともに、1月25日に生殖補助医療技術教育研究センターが開催した公開シンポジウム「生殖補助医療における安心・安全～その向上にむけて」に参加するなど、生殖補助医療技術に関する研究活動を推進した。 (6)地域イノベーションのきっかけになることを一つの目的として11月14日に開催された「岡山大学知恵の見本市2014」に、本年度は5名の教員が参加し、積極的な情報発信を行った。また、岡山県から「企業局の森 森林環境調査」などの受託研究を受け入れ、地域と連携した研究活動を推進した。 (7)今年度が最終評価年度となった2名のWTT教員について、研究・教育をバックアップしてきた結果、昨年度に引き続き2名とも高い評価を受けてテニュア資格を取得した。女性教員の増加に向け、来年度からもWTT教員の採用を継続するよう計画している。
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	
(1) 科学研究費補助金の申請については、新規申請者数 + 継続件数/教員数 × 100 の値が100%を越える状態を維持する。 (2) 共同研究費・受託研究費について、30件以上の獲得を目標とする。	

<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p>	<p>自己評価</p>
<p>③-1 目標</p> <p>(1)農学部附属山陽圏フィールド科学センター販売所や各種イベント等での農産物販売を引き続き実施し、一般市民・学生・教職員へ、新鮮で安全・安心な農作物を提供するとともに、農学・農業の重要性を社会へ発信する。また、それらの諸活動を通じ、地域社会への貢献を推進するとともに、地域農業の活性化に貢献する。</p> <p>(2)「地域活性化システム論」、「農家体験実習」、「地域農業活性化実践論」、「バイオマス産業体験講座」、中四国大学連携フィールド演習等の双方向型の講義・実習科目を開講し、人的交流を通じた地域活性化に教職員・学生が積極的に関与し、貢献する。</p> <p>(3)グッドジョブ支援センターと連携し、「農業による福祉的雇用の促進」・「福祉的農業の確立」のためのプロジェクトを推進する。</p> <p>(4)農学部および農学部附属山陽圏フィールド科学センター主催の公開講座を引き続き実施するとともに、中高生あるいは一般市民に農学のフィールドを体験してもらい、農学の広報に努める。</p>	<p>(1)農学部附属山陽圏フィールド科学センターでは、販売所、農学部玄関、大学生協、天満屋等における農産物販売を引き続き実施し、一般市民・学生・教職員に新鮮で安全・安心な農作物を提供するとともに、ホームカミングデーにおける農産物販売や「ぶどうといもの収穫体験」等も実施した。また、「農家体験実習」の実施、大学間の共同利用実習として、岡山理科大学、くらしき作陽大学、中国学園大学のフィールド実習の実施、さらに、1月からは、「岡大ファームマーケット イン Jテラス」を開始し、地域への情報発信と地域との交流を行った。これらの活動を通して、地域貢献を推進し、地域農業の活性化に貢献した。</p> <p>(2)今年度も「地域活性化システム論」、「日本農業論」、「農家体験実習」、「美作まるごと食農体験実習」、「農業者との車座トーク」を発展させた「地域農業活性化実践論」、中四国大学連携フィールド演習科目である「牧場実習」・「晴れの国岡山 農場体験実習」の2科目等を、国、地方自治体、地域農業者等と連携して開講した。また、大学コンソーシアム岡山の開講科目である「晴れの国岡山 農場体験実習」では、食品・栄養系、教育系学部学生を他大学からも積極的に受け入れた。これらの学外関係者が参画した講義・実習科目を通して、双方向による人的交流を図り、教職員・学生が地域活性化に積極的に関与した。</p> <p>(3)「農業による福祉的雇用の促進」と「福祉的農業の確立」を推進するため、農学部附属山陽圏フィールド科学センターにおける農産物販売をグッドジョブ支援センターに委託し、連携して実施した。今後のさらなる協働を目指して、農学部附属山陽圏フィールド科学センターに多目的トイレを設置した。</p> <p>(4)農学部公開講座「農学部で学ぶ生命科学実験講座：生命を化学の視点から探究する」、農学部附属山陽圏フィールド科学センター公開講座「育てて食べようおいしい夏野菜一家庭菜園のツボ2014」及びジュニア公開講座「ウシにふれよう！～まきばで食といのちをまなぶ～」の3公開講座を開催し、地域貢献を推進するとともに農学の広報に努めた。また、農学部フェアや農学部シンポジウムを通して、農学・農業の重要性を社会に情報発信した。</p>
<p>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>(1)山陽圏フィールド科学センターにおいて、大学間の共同利用実習を提携3大学と継続する。また、中四国大学連携フィールド演習2科目を開講する。</p> <p>(2)大学コンソーシアム岡山で「農場体験実習」を開講し、農学系以外の学生の受講を推進するとともに、「農家体験実習」等の双方向型の科目を開講し、地域農業者との交流を図る。</p> <p>(3)農学部及び山陽圏フィールド科学センターにおいて、3課題の公開講座を実施する。</p>	
<p>【総括記述欄】</p>	
<p>今年度も教育改革と教育改革に向けた教員の資質向上を図るため、評価の高かった講義のピアレビュー、若手教員の海外派遣、教員を対象とした英語教育を実施した。また、各種アンケートの実施や、新たにAAA(アカデミック・アドバイザー・アシスタント)制度を整備するなど、教育の質の向上に注力した。これらの取組を行ってきたことにより、本学部の留年者は減少しており、授業評価も高い水準を維持している。また、「生殖補助医療技術教育研究センター」と連携し、高度な専門職業人の養成を目的として医学部保健学科とともに開講している、「生殖補助医療技術者キャリア養成特別コース」のプログラムを更に充実させた。</p> <p>研究関連の取組では、NPO法人中四国アグリテックからの情報提供を活用した外部資金獲得への取組等を活性化させ、多くの受託研究・共同研究を受け入れるとともに、産学官地域連携協定に基づいたシンポジウムやセミナーの開催、あるいは共同研究の実施等を積極的に推進し、アジア・アフリカ諸国の大学等との交流協定を基盤とした国際学術交流も一層進展させた。また、最終評価年度となった2名のWTT教員が、昨年度と同様に本年度も高い評価を受けて2名ともテニュア資格を取得した。来年度からも1名のWTT教員の採用を予定しており、女性研究者の育成も積極的に行っている。</p> <p>社会貢献の分野では、附属山陽圏フィールド科学センターを中心に、地域農業者、地方自治体、周辺の大学等と連携して、引き続き地域活性化の取組を行った。今後も地域社会との双方向による人的交流を図り、教職員・学生が地域活性化に積極的に関与し、地域貢献を行っていく。</p> <p>本年度も学部長のリーダーシップの下、学部長室を中心に学部運営を行い、教育、研究、社会貢献等全ての分野において、本学部の目標を十分に達成できたと思われる。今後も引き続き本学の目標に沿った積極的な学部運営を行っていく。</p>	